

## アゼルバイジャンにおける茶の生産及び輸出

5月24日にアゼルバイジャンの通信社(report.az)が配信した、当地の茶の生産に詳しいガディル・バイラムル・アゼルバイジャン国家経済大学助教授と茶輸出入業者協会副理事長である、イスラフィル・イスラフィロフ・アスタラチャイ(Astaracay)社主任技師のインタビュー記事をご紹介します。

### 1. ガディル・バイラムル・アゼルバイジャン国家経済大学助教授

- (1) 製茶はソ連時代のアゼルバイジャンの農業において最も発展した部門でした。その98%はレンカラン・アスタラ地域で行われ、最初の製茶工場は1937年にレンカランで設立されて産業的な生産を開始し、1981年にはライプチヒで行われたコンテストで受賞もしました。生産された茶は国内及びソ連内の他の共和国で盛んに消費されていましたが、当地の茶生産はソ連崩壊によって大きな打撃を受けました。
- (2) ソ連崩壊後、茶畑の大部分が他の作物に転換され始め、茶の作付面積、製茶工場数はともに大きく減少しました。ソ連時代のアゼルバイジャンの緑(生)茶生産量は3.6万トンで、当時の経済規模においては非常に大きな数字でしたが、その後は500トン以下まで減少しました。その後復興努力がなされ、一定の回復をみせたものの、現在は国内需要の相当部分を輸入に頼らざるを得ず、輸入茶葉の品質も劣っています。現在、国内の茶葉生産の2%弱がザガタラ地域で行われていますが、それ以外ではレンカラン・アスタラ地域が主な生産地です。同地域は潜在的生産力も高く、かつての茶栽培農園の再開発とそれに付随する製茶産業の育成が望まれます。
- (3) レンカラン・アスタラ地域は茶やその他の温暖地作物の生産に特化することも一案です。その他の果実や野菜については他の地域にも大きな生産能力があります。逆に、例えばキュル・アラズ両河川流域は茶栽培に不適です。レンカラン・アスタラ地域で新たな農園開発、最新の栽培技術や改良種の導入等により付加価値を高めることも可能です。そのためには政府による現代的な産業育成政策の導入と支援も必要です。

### 2. 茶輸出入業者協会副理事長:イスラフィル・イスラフィロフ・アスタラチャイ社主任技師

- (1) 新型コロナウイルス感染症による隔離措置によって、農業労働者の活動が制限されたことは生産に悪影響を及ぼしましたが、それ以前から、農地への給水(特に今年は降雨が少なく湯水気味)、肥料の調達等にも課題があり、弊社のような比較的資金力がある生産者はある程度対応できたものの、零細農民は困窮しているので、政府による奨励・補助が必要です。今般、政府は新しい電子農業開発情報システムによる補助金申請の受付制度を整備し、支給を開始しました。
- (2) アスタラチャイ社の他に大手製茶企業としてアゼルスン(Azersun)社とベータ(Beta)社がありますが、この2社は輸入茶も使用しているのに対し、弊社は自社の茶畑を有し国産に拘っています。ベータ社も最近34ヘクタールの茶畑で作付を行いましたが、アゼルスンは自社の茶畑を有しておらず、輸入茶と国産茶を買付・加工しています。他2社の国産茶買付価格は1.5~1.6マナト/kgですが、弊社は農民を直接雇用し、栽培技術の質

を維持するために 2.8 マナト/kg で買い付けています。(参考:1 米ドル=1.7AZ マナト)

- (3) 今後の輸出可能性については、新型コロナの影響により当面困難な状況にありますが、例えばベラルーシとロシア市場に可能性があります。弊社はベラルーシとドイツに試供品を送り、輸入元企業との協議を予定しています。

(以上)